O-ネット通信

Association for Long Term Care Ombudsman Initiatives

第117号

2021/1/28

発　行

特定非営利活動法人

介護保険市民オンブズマン機構大阪

〒537-0025 大阪市東成区中道3-2-34 JAM大阪2F

TEL.06-6975-5221

FAX.06-6975-5223

E-mail:o-netnpo@train.ocn.ne.jp

URL:https://o-netnpo.site/

シンポジストの面々。左から、結城康博淑徳大学教授、濵田和則晋栄福祉会理事長、山本愛とよなか国際交流協会事務局次長、小林弘法O－ネット理事。手前はコーディネーターの三木秀夫O－ネット代表理事。

設立20周年記念講演会

外国人介護スタッフの受入れと支援

本気なら、国も社会も「覚悟」必要

O－ネットでは11月14日、設立20周年記念講演会（第60回O－ネットセミナー）をドーンセンターで開催しました。『外国人介護スタッフの受入れと支援』をテーマに、前半は基調講演、後半はシンポジウムを行いました。講演会は「キリン・地域のちから応援事業」に昨年応募し、キリン福祉財団から助成を受けた企画。コロナ禍によって外国人の入国がままならないこと、国内の感染者も急増していることなどにより、参加者は30人と少なめでした。しかし日独の現状比較を通し、我が国の今後を考えるうえで非常に有意義な講演会となりました。

基調講演　ドイツの介護動向と日本のこれから

淑徳大学教授　結城康博さん

日本の福祉研究者の中で、ドイツを研究する人は数人しかいません。しかしドイツは、介護保険制度、高齢化率（21・7％）・人口（8315万人）・経済規模等、日本とよく似ている。比較研究の対象国として、私はここ十数年、毎年渡独しその動向を見てきました。

ドイツでも介護職は不人気で、今や外国人なくして介護業界は成り立たない状況です。私はこれまで40施設ほど視察してきましたが、介護職員の3割以上は外国人。7割に上る施設もある。出身地も多様で東欧諸国やトルコの他、北アフリアカやフィリピンなどアジアの人々も。永住権さらには市民権を持つ人も多く、管理職も少なくありません。

ドイツの介護保険では在宅介護の場合、現金給付も選択できます。その在宅介護を支えているのが、住み込みの家政婦兼介護員として働いている東欧から来た人々です。施設介護なら介護保険を利用しても月30万円は自己負担が必要ですが、在宅介護で住み込みの家政婦を雇えば月20万円前後で済む。要介護者の年金と介護保険の現金給付で工面できる金額のため、需要が増しています。

外国人労働者を積極的に受入れ、権利保障も整うドイツでは、今では雇う側も違和感なく、働く側も疎外感が少ないのが現状。加えて「ドイツ語や歴史文化を学ぶ600時間のプログラムを国が義務付け、大半を公費で補助する語学支援」や「長期休暇が取れ、一時帰国もしやすい労働環境」なども外国人には魅力です。

このようにドイツがそれなりの「覚悟」を持って受入れ策を進めているのに対し、日本はまだ「労働力」としてしか捉えていない。賃金が魅力なのは今のうちだけで、日本人に選ばれない職場が外国人に選ばれるはずがない。まずは日本人が定着する職場環境を早急に整えることのほうが大事です。

「共生」の真の意味を私たち皆が理解することも必要です。例えば、母国の祭日に外国人が騒いでいても黙っていられる。そうしたことができる社会にならないと、外国人の確保・定着は難しいでしょう。

シンポジウム　外国人スタッフを迎えて　～施設でできること、地域ができること～

4人のシンポジストが3つのテーマについて意見を交わしました。

日本語学習支援について、「現状では外国人本人と受入れ施設に丸投げされ、日本人職員やボランティアで支えている状態」と結城教授が指摘。地域で外国人支援に携わる山本愛とよなか国際交流協会事務局次長は「例えばチラシを見て買い物に行き、調理をして…といった生活行為を一緒に行う。そんな支援方法で〈使える〉日本語にしていく工夫も必要だ」と述べました。

外国人労働者が抱える悩みについては、さまざまな事例が挙げられました。外国人を積極的に雇用している晋栄福祉会（裏面参照）の濵田和則理事長は「日本語や仕事以外にも、結婚・妊娠、本国で暮らす親の病気、仕送りのことなど外国人職員が抱える悩みは多い。気軽に相談でき柔軟に対応できる環境を法人が整えることが大切」と伝えました。

外国人を社会で受け入れていくにはNPOや地域にも対応が求められます。行政書士としてビザの手続き等にも携わる小林弘法O－ネット理事は「O－ネットではこれまで施設と利用者の橋渡しを担ってきたが、今後は外国人職員を含めた橋渡しにも取り組んでいきたい」と抱負を述べました。

山本さんは地域の防災訓練に技能実習生たちが参加した事例を紹介。「若くて元気な彼らがバケツリレーで圧勝し、住民たちが彼らを知るきっかけとなった。そこから頼り・頼られ…といった交わりも生まれる」と話しました。

一方、結城さんは「私たちが閉鎖的な島国根性を変えられるかがカギだ。日本人の価値観を押し付けてはダメ。それができないと外国人に〈選ばれる国〉にはならず、欧州や中国との人材獲得競争でも負ける」と厳しい提言も。「確かにこのままだと〈選ばれない国〉かも。だからこそ今、風が吹くうちに乗り越えるよう努めたい」と山本さん。「外国の人たちの権利を保障するよう声を挙げ、法律・制度を変えていくことも、私たちに課せられた役割です」

オンライン

10月・12月もZoomで職員研修を開催

Oーネットでは昨秋、Zoomによる職員研修を9月に続き2回実施しました。10月9日『外国人スタッフとともに働く職場環境づくり』（日本社会福祉弘済会・助成）は20名、12月15日『介護職が知っておきたい医療知識』は38名が参加。それぞれオンブズマンの希望者も聴講しました。

外国人120人以上を雇用

Zoom の「画面共有」で資料を提示しながら講義を行う大北施設長。参加者からの質問も相次いだ。

10月の研修は、「外国人介護人材の受け入れ」と題して、前半は特養・ナーシングホーム智鳥の大北淳施設長の講義を、後半は「介護施設で働き始めて思うこと」で外国人の方2名の体験談をうかがいました。

ナーシングホーム智鳥の母体である社会福祉法人・晋栄福祉会は、2009年から外国人スタッフの受入れを開始。系列7施設に外国人職員124名が勤務しており、職員全体の1割以上に及んでいます。

採用ルート別では、EPA（経済連携協定。対象国はインドネシア、フィリピン、ベトナム）94名、介護ビザ16名、留学生7名、技能実習生・特定技能各3名、医療ビザ（看護）1名。EPAの人たちは4年間で介護福祉士取得を目指します。

違いを認め、向き合うこと

努力家で明るく、目上の人を敬う文化をもつ国々から来た外国人職員は、利用者や家族にも好評。ケアに対する真摯な姿勢が、日本人職員にもよい影響を及ぼしています。

一方、「毎日曜日ミサに行きたい」「同僚と一緒に一時帰国したい」といった要望が出てくることも。「考え方の違いはあって当然。大切なのは要望を知り、きちんと向き合うこと。違いを把握した上で、調整が必要な場合は理由をていねいに説明します」と大北さん。「同時に生活面では異国での不自由さや寂しさを感じないよう心を配る。そうしたきめ細かな対応の積み重ねが、外国人も働きやすい職場づくりにつながっていく」と話しました。

グループワークにも挑戦

12月の研修「介護職が知っておきたい医療知識」では、講師に山崎尚美・畿央大学教授（看護学）を迎え、高齢者に多い病気の特徴や観察ポイント、感染予防管理などを学びました。

Zoomによるグループワークは初めてだったためトラブルもありましたが、映像や音声を手軽に盛り込めるオンラインの利点を感じた研修となりました。

介護施設で働き始めて思うこと

レイティ・タムさん

（小規模多機能型居宅介護事業所・きずな）

日本語難しい。大阪弁も大変です！

日本で働いてみたいと思い、ベトナムから来ました。

日本語の勉強は主に来日してからだったので、最初はまったくわかりませんでした。発音が同じでも意味が違う言葉があるし、大阪弁も慣れるまで大変でした。ベトナムではお年寄りの世話は家族がしています。施設なんてみかけません。そこがすごく違うところです。

もうすぐ赤ちゃんが生まれます。子どもは日本で育てたい。そして日本語の先生になればいいかな（笑）。

ステファニ・ディアナ・シウィナンティさん

（特養・宝塚ちどり）

最初は介護の仕事に戸惑いました

EPAでインドネシアから来ました。苦労したのは介護福祉士の資格試験です。既定の期間内では合格できず一旦帰国。再度挑戦してやっと合格できました。

介護の仕事は最初かなり戸惑いました。母国では看護師として手術の立ち合いなどをしていただけに、「おむつ交換？なに、これ？」って感じでした。でも周囲からサポートを受けるうち馴染めるようになりました。

TVドラマ「相棒」や「科捜研の女」が好き。日本語の勉強にもなります。

カレンダー

1月～3月

1/7（木）	仕事始め、デジタル化応援事業打合わせ
2/8（月）	合同会議（代表・副代表・事務局員）
2/15（月）	職員研修実行委員会
2/27（土）	第59回Oーネットセミナー
3/23（火）	理事会
3/25（木）	外部評価審査員会、外部評価調査員研修会
3/27（土）	オンブズマン研修会

ご寄付いただきました

芦田智子、石川恭子、伊藤康子、緒方しのぶ、岡田千鶴子、川上正子、川本敏久、楠木鈴子、栗山千代子、後藤田慶子、小林加代子、小林弘法、阪口恵美子、田井中久美子、田代眞朱子、多田茂、土橋美也、中下吟子、中村紀子、中村博士、西田清美、藤井敬子、藤本委扶子、堀川世津子、三木秀夫、守美枝子、薮下としみ、山下景子、吉岡淳子（以上、敬称略）

オンブズマン研修会

施設の様子知る機会に

オンラインで2施設と

11月7日、オンブズマンを対象に研修会を開きました。『コロナ禍の中、活動施設はいま』をテーマに感染予防の取り組みなどについて、オンラインで2施設の話を伺いました。「密」を避けるため7月同様、午前・午後の2部制で実施。来局の他、オンラインでも参加できるようにしました。

大仙もずの音・加寿苑の話に耳を傾けるオンブズマンの皆さん

最初に吉田啓太・大仙もずの音施設長が自施設の現状を説明。マスクにフェイスシールドやゴーグルを着けての介助の様子、アクリル板等で仕切られたテーブルでの利用者の食事風景など、写真も交えて日常の様子を伝えました。制約ある日々ですが、ユニットごとの敬老会や面前調理による食事会など楽しみも工夫して行われています。

「家族に少しでも安心してもらえるように、窓ごしやオンラインでの面会、ユニットごとのお便りや広報誌の送付、電話での近況報告、ブログの更新等に努めている」と吉田さん。「認知症の方の家族にオンライン面会が多い」「入院患者は昨年より3割減」「業務効率を図り、おしぼり機器・ボックスシーツなど便利な機器を積極的に活用」といった興味深い話も伺えました。

「入居の方に大きな変化はないが、散髪や食事・催しなどこれまで築いてきた地域との交流を持てないのは残念」と話すのは西岡剛・加寿苑副施設長。特養にコロナを持ち込まないようデイサービスとはゾーンや動線、担当する職員の更衣室・休憩室を分け、感染対策の徹底を図っています。

「ホームページ等を充実させ、キーパーソン以外の人にも面会情報などを充実させていきたい」と西岡さん。「ピンチをチャンスととらえ、業務内容の見直しにも取り組んでいきます」